

清代「集選詩」に見える『文選』の受容

市瀬信子

はじめに

清代は『文選』に関する学問が進み、文選学が隆盛を誇った時代だと言われる。ただし、それは主に考証学と関わるものについて与えられた評価である。小尾郊一氏は全釈漢文大系二六『文選（文章編）一』（集英社 一九七四）の解説において、清代の『文選』について「清代では、考証学の発展とともに文選学も盛んとなる。しかも、李善注も研究の対象となっていたことは、古書を多く引用する面が清朝考証学者の好みに合ったものである。」と述べている。ところで、唐代における『文選』の流行について、小尾氏は以下のように述べる。

唐代において文選学が盛行したのは、なんといっても科挙に詩賦を課したことが原因であろう。当時にあつては経書と同等の扱いを受けていたと思われる¹⁾。

科挙と『文選』の関係を表す宋代の『文選』爛にして、秀才半ばなり²⁾は、『文選』に精通することが科挙合格へ

の必須事項であつた時代を象徴するものである。こうした時代と比較すると、清代における『文選』隆盛の背景は大きく異なる。清朝初期に、詩賦が科挙の科目からはずされていたからである。詩賦が科挙に復活するのは、乾隆二十二年（一七五七）のことであり、清朝成立から約百年後のことである。その間、詩を作ることは挙業の妨げとされ、邪道という扱いを受けた。唐代に詩賦が科挙に取り入れられたのとは、状況が異なつたのである。よつて、詩を作ることが評価されない環境の中で、『文選』は作詩のためでなく、考証学の研究の対象とされ、詩注や版本についての研究が主となつたと考えられる。

科挙に詩賦が復活して以降、詩を学ぼうという人々がにわかに増加した。だが、詩作の見本が六朝までであつた唐代とは状況が異なり、清の前には、唐宋という詩の隆盛期があつた。清初は唐宋詩こそが、詩を学ぶ者がまず取り組む対象とされた。では、こうした時代に、『文選』はどう位置づけられ、またどのように受容されたのだろうか。

そのヒントとなる一つの興味深い作品がある。清末の

『選樓集句』である。鈴木修次氏は、『全釈漢文大系』月報二十一『選樓集句』そのほか（集英社 一九七六）で、偶然手にした『選樓集句』について記している。これは『文選』の句を集めてしたた文を収めたもので、著者は、広東広州府の番禺県の人である許祥光、字は賓衡で、道光二十年（一八四〇）、『粵東省城四湖街』の「富文齋」なる書肆から梓行されたもの³⁾で、鈴木氏は、この作品に対し、次のように述べる。

集句によつて文を作るといふのであれば、『文選』の大概を暗記しているのでなければなるまい。許祥光についてくわしいことはわからないが、たぶんはいわゆる「文選学」の学者ではなかつたであらう。しかし、『文選』の句を縦横に使いこなさうる造詣を、この人は身につけていたのである。ついでにいえば、跋文をしるしている戴熙なる人は、許祥光にあやかつてやはり『文選』から集句して跋文にしたりしており、林伯桐という人は、『文心雕龍』から集句して跋を作っているし、黄輝という人は、司空図の『詩品』から集句して跋をしるしている。集句というゲームが、許祥光の仲間においていろいろと行われていたらしいことをおもわせる。

中国の昔の士人たちが、自己の詞藻を豊かにするために『文選』をよく咀嚼したということは改めていうまでもないことであるが、十九世紀にあつてなお『文

選』に精通すること許祥光のごとき人物が、別に文選学者ということではなしに存在したということは、改めて感慨を新たにするものがある。野にはやはり、思ひもかけぬ遺賢が存在するものだ。許祥光の『文選』の実力は、当今の専門家を優に越すであらう。

これは清末の状況であるが、「集句」が『文選』を題材として行われていたという事実を示している。更に鈴木氏は、『文選』の集句が過去にあつたものかどうか、事実をたしかめ得ないが、潘世恩の序文や友人たちの跋文に、『文選』を対象にして集句をしたのは、許祥光の『選樓集句』が最初であると説かれている⁴⁾ことを記している。現在の研究では、『文選』を対象とした集句は、それ以前にも作られていたことが明らかになっている。そうした詩は「文選集句詩」「集選詩」等と称されるが、本稿では、一括して「集選詩」と称することとする。集句詩研究の第一人者である張明華氏は、清代を集句の繁栄期とした上で、清代集句の特徴の一つに、句の対象を杜甫、李白などに特定した、いわば「類別の集句」があつたことを指摘し、その一つとして「集選詩」を挙げている⁵⁾。張明華氏によれば、「集選詩」の最初は、宋の孔平仲の「集文選句贈別」、「文選集句寄慎思、交代学士、慎思遊岳、老夫守舍、叙述游旧。慎問交承与夫舍舟登陸之策、俱在此矣」（『清江三孔集』卷二十八）の二首で、それ以降、実際に残っている作品は清代までないという。つまり、

『文選』を対象とした集句は、清代に新たに発展したものであり、その流れの中で『選樓集句』も生まれたと考えられる。そこで、清代の「集選句」の状況を検討し、『選樓集句』に至るまでの経緯を考察することから、清代における『文選』受容の側面を明らかにしたいと考える。

集句研究に関する近年の状況をまず見ておくこととする。集句を集めた作品集はこれまでも幾つかあったが、二〇一九年に緱蔓君編『歴代集句詩詞別集叢刊』全二十四冊（北京燕山出版社）が刊行された。これまでにこのような大部の集句詩集が編纂されたことはなく、今後集句についての研究が飛躍的に進むものと考えられる。集句についての研究の嚆矢となるのは、裴普賢『集句詩研究』（台湾学生書局 一九七五）で、集句の発展を時代を追って論述し、代表的作家の作品を取りあげる。裴普賢『集句詩研究続集』（台湾学生書局 一九七九）は、先の『研究』を補う形で更に多くの作品を取りあげるが、いずれも『文選』を題材とした「集選詩」には触れていない。近年張明華氏によって、集句詩研究が精力的に進められており、張明華・李曉黎『集句詩嬗變研究』（中国社会科学出版社 二〇一一）、は、非常に多くの集句詩の名を挙げ、その中に「集選詩」の他、『玉台新詠』の句を集めた詩集などについて取りあげる。張明華・李曉黎『集句詩文獻研究』（社会科学文献出版社 二〇一一）は、時代別に集句詩を取りあげる中で、特に清代の集句詩を時

代別に取りあげている。そこにはいかなる作品の句を集めたものが記してあり、「集選詩」が全体の集句詩の中で極めて少ないことがここから見て取れる。張明華『文化視域中的集句詩研究』（中国社会科学出版社 二〇一四）は、「集選詩」をまとめて取りあげた唯一の研究書であり、本稿はこれに拠るところが大きい。加えて清代の詩、清代の科挙に関する研究を参照しつつ、考察を進めた。

一 清代の科挙と詩

最初に述べたように、清代初期は、詩は科挙の妨げとなるものとして、科挙を学ぶ者から敬遠されていた。蒲松齡（崇禎十三（一六四〇）年―康熙五十四（一七一五）年）は次のように記している。

当今以時芸試士、則詩之為物、亦魔道也、分以外者也。《聊齋文集》卷一「郢中社序」

当今時芸を以て士を試みるに、則ち詩の物為るや、亦魔道なり、分以外の者なりとす。

蒲松齡は科挙に詩賦のない時代の人物である。そのころ詩は、科挙に臨む者にとつては「魔道」であり「分以外」のものであったという。更にやや遅れて厲鶚（康熙三十一（一六九二）年―乾隆十七（一七五二）年）も次のように述べている。

往時、吾鄉士友專攻舉子業、例不作詩。乙未、丙申間、予輩數人為文字之會、暇即相与賦詩為樂。

《樊榭山房集》文集卷三 「無悔齋詩集序」
往時、吾が郷の士友 挙子の業を専攻し、例ね詩を作らず。乙未、丙申の間、予の輩數人 文字の會を為り、暇あらば即ち相与に詩を賦して楽しみと為す。

厲鶚十一、二歳の頃、杭州で受験勉強の合間に友人達と詩会を楽しんだという。しかし、それは科挙を学ぶ学生の中では、特殊なことだったようだ。つまり「挙子業」に取り組むなら詩を作らない、というのが多くの学生の態度であった。乙未、丙申は、康熙五十四、五十五年にあたり、時期としては科挙に詩が取り入れられる前となる。同時代の吳敬梓『儒林外史』第三回には、詩を学ぶ魏好古なる童生を、試験官の周進が叱りつける有名な場面がある。

那童生道、「童生詩、詞、歌、賦都會、求大老爺出題面試。」学道變了臉道、「当今天子重文章、足下何須講漢唐。像你做童生的人、只該用心做文章。那些雜覽、学他做甚麼。況且本道奉旨到此衡文、難道是来此同你談雜学的麼。……」
（吳敬梓『儒林外史』第三回）
その童生は言った「私は詩、詞、歌、賦いずれ得意ですので、どうか出題して私をお試ください。」

学道は顔色を変えて言った。「当今の天子様は文章を重んじておられる。お前はこうして漢や唐（の詩賦）を持ち出すのだ。お前のような童生は、ただ心を文章を作ることにもちいねばならん。あのような雑著など、学んでどうする。ましてや本官は聖旨をいただいてここに文章を評定しに来ているので、お前と雑学を語るためなどであるものか。」

ここでも詩は雑学とされ、科挙の学業の妨げとされている。康熙の進士であった何焯の『義門先生集』にも、詩や古文を作る者を嘲笑して「雑学」と言ったという記述が見える。

吾郡士子專工制舉之文、間有從事詩古文者、相与目笑之為雜学。《義門先生集》卷一「恭祝伯母武陵

太夫人八秩榮壽詩序」

吾が郡の士子 専ら制挙の文に工にして、間ま詩古文に従事する者有れば、相与に目して之を笑ひて雑学と為す。

このように、科挙にとつては詩は邪道、雑学とされていたが、同時期に、宮中では詩を非常に重視する動きがあった。それは康熙帝が詩賦を愛好し、詩賦に対する造詣も深かったことによる。康熙朝に翰林院で数多く行われた修書事業の中でも、詩賦に関するものが非常に多い

ことは注目すべきことである。代表的なものを以下に挙げる。

康熙四十五年『御定歷代賦彙』正集一百四卷外集二十卷
卷逸句二卷補遺二十二卷目錄三卷
康熙四十六年『全唐詩』九百卷目錄十二卷
康熙四十六年『欽定歷代題画詩類』一百二十卷
康熙四十六年『佩文齋詠物詩選』四百八十六卷
康熙四十七年『佩文齋詠物詩譜』一百卷
康熙四十八年『御選宋金元明四朝詩』三百二卷
康熙四十九年『淵鑑類函』四百五十卷目錄四卷
康熙五十年『佩文韻府』一百六卷
康熙五十一年『御製避暑山莊詩』二卷
康熙五十二年『御選唐詩』三十二卷
康熙五十五年『清聖祖御製詩』初集十卷、二集十卷、三集八卷
康熙五十九年『韻府拾遺』一百六卷
康熙六十一年『分類字錦』六十四卷

これらは詩を分類収集したことから、注釈を施したものの、また詩を作るための便に供するものなど、実に多岐にわたっている。こうした編纂事業を奨励した康熙帝の詩に対する考えは各所に表れている。

朕万幾余暇、留意篇什、広搜博採、已刻全唐詩集。

論大学士等曰、翰林官員内、多有不識字義、不能作詩文者。此皆教習不勤之故。……又論曰、道学者、聖賢相伝之理、読書人固当加意、然詩文亦不可廢。或有務取道学之名、竟不留心於詩文者、此皆欺人耳。
〔清実録〕聖祖 卷二五六 康熙五十二年十月）
大学士等に論して曰く、翰林官員内、多く字義を識らず、詩文を作る能はざる者有り。此れ皆教習勤めざるの故なり。……又論して曰く、道学なる者は、聖賢相伝ふるの理、読書人固より当に意を加ふべし。然れども詩文も亦廢すべからず。或いは道学の名を取るに務めて、竟に心を詩文に留めざる者有り、此れ皆 人を欺くのみ、と。

教養あるはずの翰林院の人材が字義も知らず、詩文も作れないことを、康熙帝は教育の不足と嘆いている。また、道学と同時に「詩文」は廢れさせてはならない、と強調する。これは『御選唐詩』刊刻の歳の発言であり、「後学に示す」とはこうした詩文の教養不足を嘆いた上での発言だったことがうかがえる。

上記のように、翰林院での修書作業に取り組む人材を確保するため、詩文の才ある人材を広く求める必要があった。それは八股文の才で試みられる通常の科挙では確保できないものである。そこで、清朝では特殊な試験が実施された。それが博学鴻詞である。博学鴻詞は康熙十

而自曩昔披覽、嘗取其尤者、彙為一編。……因命儒臣、依次編注、朕親加考訂。一字一句、必溯其源流、条分縷析、其有徵引、訛誤及脫漏者、隨論改定。逾歲告成。因付開雕、以示後学。（聖祖康熙帝「御選唐詩序」）

朕 万幾の余暇、篇什に留意し、広く搜し博く採り、已に全唐詩集を刻す。而して曩昔より披覽し、嘗て其の尤なる者を取りて、彙めて一編と為す。……因りて儒臣に命じて、次に依りて編注せしめ、朕親ら考訂を加ふ。一字一句、必ず其の源流に溯り、条分縷析し、其の徵引、訛誤及び脱漏の者有らば、論に随ひて改定せしむ。逾歲告成す。因りて開雕に付し、以て後学に示す。

『御選唐詩』は、『全唐詩』から詩を選び、注を付したものである。そして「朕親ら考訂を加ふ」とあるように、康熙帝自ら考訂にも参加している。典故については源流たる過去の作品に遡って確認しており、更に刊行することとで後学に示す、と、詩を学ぶ人のために編纂したことを述べている。

更に康熙帝は、翰林院の人材は編纂事業に従事する任務があり、そのために文学に習熟し、その他の知識を広く兼ね備えねばならないという考えがあった。この考えは、以後編纂事業を重ねてゆくうちにいつそう強くなったのみならず、編纂事業そのものが教養を養うための重要事だと考えるようになった。

八年と、乾隆元年、二年の三度のみ行われた。試験は詩を主としたものであった³⁾。

康熙博学鴻詞は、明史編纂のための要員を集めるという名目で行われたが、遺民を人材として取り込むのが主な目的であつたとされる。「己未試題」、「璇璣玉衡賦」、「御製省耕七（七）は「五」の誤り）言排律詩二十韻」（『聽雨叢談』卷四「博学鴻詞制科 經学制科」）などの試題に示されるように、詩賦を以て試験が実施され、朱彝尊、查慎行、王士禛ら清初の名だたる詩人が採用されることとなった。乾隆年間も詩賦を以て試され、杭世駿、沈廷芳、齊召南など、詩文經学で名を残す人材が採用されている。

また博学鴻詞以外にも、「召試」という試験があつた。「召試」について狩野直喜氏は、『清朝の制度と文学』（みすず書房 一九八四）で以下のように説明している。

それから又召試といふ事あり。それは康熙・乾隆それから嘉慶のときにも行はれたる事なり。それは康熙・乾隆諸帝は屢々江南に巡幸ありき。江南は学士文人の多き地方なれば、各々争うて詩賦を作りて之を奉る。然るときは天子之れを聞し、其の尤も佳なるものを選び、作者を行在に召し、別に御題を賜はりて之れを試み、其の甲乙によりて官を賜ふ。清朝文人の伝記を見れば、此の恩典に浴したるもの頗る多し。

前に挙げたる如く、時を定めて行ふ科挙によりて士

を取る外、臨時に鴻博、經学、召試等のことありて、学士文人は其の文芸を以て功名の門に進むことを得たり。

皇帝の巡幸に際して詩を献上し、選ばれるとお召しがかかり、皇帝が直接出題した詩題によって詩を詠ずる。その詩によって任官が決定されるというのが「召試」である。『郎潜紀聞二筆』卷十四「本朝特科得人之盛」には、康熙朝では江浙への二度の南巡で七十三人、乾隆朝の江浙へ六度、山東へ三度、天津へ四度の巡幸の折りに、召試により、百二十七人を得たことが記されている^[4]。

このように、清代は、科挙の正式な科目に詩がなかった時期があったが、その間、博学鴻試、召試という、詩で任官がかなうルートがあり、詩を作ることには、地位を得るための相応の価値があったといえる。その意味では必ずしも雑学ではなかった。

こうした流れと必ずしも無関係ではなかったものとして「集句詩」があった。

二 清代の集句詩

そもそも集句とは、過去の詩文の句を用いてそれを組み合わせ、新たに詩文を作ることと言った。その始まりは、晋の傅咸の「七経詩」とされる。これは『孝経』『論語』『毛詩』『周易』『周官』『左伝』の句を多少の変更を加えつつ組み合わせ四言詩としたものである。

清の黄之雋『香屑集』の『四庫全書総目提要』に、集句の歴史を踏まえて次のように述べている。

『香屑集』十八卷……国朝黄之雋撰。之雋字石牧、号唐堂、華亭人。康熙辛丑進士、官至右春坊、右中允。是編皆集唐人之句為香廬詩、凡古今体九百三十余首。前有自序、亦集唐人文句為之、凡二千六百余餘言。集句為詩、始晋傅咸、今載於『芸文類聚』者、皆寥寥数句、声韻僅諧。劉勰『明詩』不列是体、蓋繼之者無其人也。有唐一代無格不備、而自韋蟾妓女統楚詞兩句^[5]之外、是体竟亦闕如。至北宋石延年、王安石、間以相角、而未入於集。孔武仲始以入集、而別錄成卷、尚未單行。南宋李縉之『梅花納翦綰集』、文天祥之『集杜詩』、始別著錄。然卷帙亦無多。之雋是編雖取諸家之成句、而對偶工整、意義通貫、排比聯絡、渾若天成。

『四庫全書総目提要』卷一百七十三「香屑集十八卷」
『香屑集』十八卷……国朝黄之雋撰。之雋字は石牧、唐堂を号とし、華亭の人。康熙辛丑の進士、官は右春坊、右中允に至る。是の編皆唐人の句を集めて香廬詩と為し、凡そ古今体九百三十余首。前に自序有り、亦唐人文句を集めて之を為り、凡そ二千六百余言。句を集めて詩を為るは、晋の傅咸に始まり、今『芸文類聚』に載る者、皆寥寥数句、声韻僅かに諧ふのみ。劉勰『明詩』は是の体を列ねず、蓋し之を継ぐ者に其の人無ければなり。有唐一代は格の備

はらざる無くして、韋蟾の妓女、統楚詞兩句の外、是の体竟に亦闕如たり。北宋の石延年、王安石に至り、間ま以て相角するも、而も未だ集に入れず。孔武仲始めて以て集に入れて、別録して卷と成すも、尚ほ未だ単行せず。南宋の李縉の『梅花納翦綰集』、文天祥の『集杜詩』、始めて別に著録す。然れども巻帙亦多きこと無し。之雋の是の編 諸家の成句を取ると雖も、而も對偶工整、意義通貫し、排比聯絡して、渾として天成のごとし。

黄之雋の「香屑集」は、艷詩を唐詩句を用いて集句詩の形にしたものである。提要では、北宋まではほとんど集句詩として形になるものがなかったとする。南宋ではじめて作品集としてまとめたものが出現したが、作品の分量は多くない。元明については触れず、清の黄之雋に至り、はじめて大きな作品集となったという。黄之雋は康熙七年から乾隆十三年の人で、科挙に詩賦が入っていない時期に、清代を代表するこの集句詩集が作られているのである。これは、科挙と関係のない所で集句詩が盛んに作られた可能性を示すものである。

宋代に盛んに作られるようになった集句詩は、戯作として作られるのが主であった。最も優れた作者とされるのが王安石で、張明華氏らによれば、その作品数は、『全宋詩』に収録されているものだけで、六十八首にのぼる^[6]。やがて明代になると、集句詩は更に盛んになり、清

代はより一層盛んに集句が作られたという。集選句が盛んに作られるようになった背景を知る上で、まず集句詩がどう見られていたかを確認しておく必要がある。集句詩に対する肯定的な評価の例を幾つか挙げてみる。
清代を代表する集句詩集、黄之雋撰『香屑集』についての『四庫全書総目提要』は、「對偶工整にして、意義は通貫し、排比聯絡、渾として天成の若し。」「其の記誦の博きこと、運用の巧、亦一の才無かるべからず^[7]」と、句の組み合わせの妙、できあがった作品の文脈がきれいに繋がっていること、詩句を広く暗記して用い、自然にできあがったかのような詩になっていることを絶賛している。博識と文才が両立していることに詩人の優秀さを見出しているのである。当時集句を作ることとは、知的で学問があることの証左とされたのである。

しかし、集句詩が所詮借り物の詩句をつなぎ合わせたものに過ぎないという批判や軽視も当然あった。それにも関わらず、集句が清代に高く評価されたことがわかる例をもう一つ挙げておく。杭州の柴傑による『西湖百詠』（『武林掌故叢編』所収）である。『西湖百詠』は、乾隆十六年（一七五二）春三月に、乾隆皇帝が南巡して杭州を訪れた際に献上されたものである^[8]。前半は『西湖遊覧志』『西湖志』等を用い、西湖に関することを一字一句の注に原書を示した上で記した、歴史資料のような作りになっている。同じ杭州の厲鶚達が雍正二（一七二四）年に作成した『南宋雜事詩』のような作り方である。そ

して後半が唐詩を集めた集句となっている。朱珪の序に以下の言う。

集句一体、談詩者多略之、謂其不自己出、無関性靈也。……錢唐柴子臨川好為此体、綴緝自然、有天然無縫之妙。……辛未春、翠華莅浙、臨川曾獻西湖十景集句、与邀恩賚、丙午膺鄉薦、礼闈後、蒙特恩賜銜国子監学正。……予謂、非詭万首詩、不能為集句。于此見臨川之讀書、用力深而取材富也。〔西湖百詠〕朱珪序

集句の一体、詩を談ずる者多く之を略し、其の自己より出でず、性靈に関わる無しと謂ふ。……錢唐の柴子臨川好んで此の体を為り、綴緝すること自然、天然無縫の妙有り。……辛未春、翠華浙に莅むに、臨川曾て西湖十景集句を献め、恩賚を邀ふるに与かり、丙午郷薦を膺け、礼闈の後、特恩を蒙り国子監学正を賜衡す。……予謂へらく、万首の詩を読むに非ざれば、集句を為ること能はず、と。此に于いて臨川の書を読み、力を用ふること深くして材を取るに富むを見るなり。

集句という詩体については、詩を語る者の多くがそのことを略す、というのは、集句詩を記録しないことを言う。集句詩に作者の独創性がないことから、作品を軽視する者もある中で、杭州錢塘の柴傑はこの詩体を好んで作り、自然な作品を作り上げ、賞賛されたという。そし

ここでは、皇帝に献上する頌に、なぜ集句という形式を用いるのかという理由を説明したものである。天子の活躍を宣べるのに、学殖の不足してい自分の言葉を用いることは不遜であるため、集句の作者傳威に倣って唐人の文句を並べて詩を作り、天子の徳を示すという。古人の句は權威のある言葉であり、それを用いる集句詩は、作品を贈られる相手への崇敬を示すものである、という認識であり、こうした場では、作者の個性や心情は優先されることはない。

柴傑の集句詩が皇帝の南巡に献上されたのも、同様の理由であろう。このように、清代の集句には、權威をまとった言葉による、權威有る者に献上する作品という一面を持つこととなった。古典の知識に富み、それを自在に詩にすることができ詩才を示すものとして、また、權威有る古典の語を用いて、相手への崇敬の念を示すものとして、集句詩は尊ばれたと考えられる。これは「集選詩」においても同様であった。

三 清代の「集選詩」

集句詩の中には、特定の人、作品集、時代、梅花などの句を集めて作られるものがあることは先に述べた。そうした類別の集句詩の中で、圧倒的に多いのは唐詩の句を集めた「集唐詩」である。張明華・李曉黎『集句詩文献研究』（社会科学文献出版社 二〇一二）は、調査した

て乾隆帝南巡の折に西湖十景の集句詩を献上したところ、乾隆帝に認められ、国子監学正を賜ったという。集句詩は、献上するにふさわしい詩体であり、また官位を賜るに値する作品であるとされたのである。これが先に述べた召試にあたる。集句詩は、科挙にかわる博学鴻試、召試などの詩による試験において、詩才を評価される重要な詩体であった。実際のところ、当時の著名な士大夫で清代で最も優れた詩人と称される朱彝尊、王士禛、查慎行、厲鶚、齊召南らは、いずれも集句詩を作っており、四庫全書總纂官に任じられた紀昀にも唐文の句を集めた集句詩があり、その自序に次のように述べる。

今聖天子驅馭虎貔、翦除狼虺、通亘古不通之險、；其可不作為文章、以歌詠休明。顧学殖荒落詞不副意、不敢自為撰著、謹仿晋傳成集句為詩之例、裒輯唐人旧文、排比倫次、為雅詩十二章、以廣揚盛烈昭示。

（紀昀「頌平定両金川雅謹序」乾隆四十一年代作『紀文達公遺集』卷三）

今聖天子虎貔を馭馭し、狼虺を翦除し、亘古不通の險を通ず、……其れ文章を作為して、以て休明を歌詠ざるべけんや。顧るに学殖荒落し詞意に副はず、敢へて自ら撰著を為さず、謹みて晋の傳成集句もて詩を為るの例に仿ひ、唐人の旧文を裒緝し、排比すること倫次、雅詩十二章と為し、以て盛烈を廣揚して昭示す。

限りの集句詩について、それぞれの概要を記した労作であるが、歴代最も多いのは「集唐詩」であり、類別の集句詩が増加したと言われる清代にあつても、集句のほとんどが「集唐詩」であり、ついで「集杜詩」と続く。『文選』の句を集めた「集選詩」は、極めて少数派だったといえる。よって、「集選詩」に関する論稿は多くはない。張明華『文化視域中的集句詩研究』（中国社会科学出版社 二〇一四）は、「集選詩」を特にとりあげて論じた貴重な研究書であると思われる。それを参考にしつつ、清代の「集選詩」について見てゆくこととする。

先に述べたように、「集選詩」の最初は、宋の孔平仲の「集文選句贈別」、「文選集句寄慎思、交代学士、慎思遊岳、老夫守舍、叙述游旧。慎問交承与夫舍舟登陸之策、俱在此矣」〔清江三孔集〕卷二十八の二首とされる。これらの詩は、「詩戲」として収録されており、遊びの詩として作られたものであった。その「詩戲」には、他に集唐詩「方逢原借示方先生詩以集句詩贈之」もあり、とくに『文選』に拘ることなく集句詩を作っていたようだ。

「集文選句贈別」は、各詩句の後ろに、引用した詩句の作者の名を入れ、例えば「離別在須臾〔李少卿〕、置酒宴所歡〔陸士衡〕、借問此何時〔張景陽〕……」と言った形で作られている。もう一方の「文選集句寄慎思……」は、詩題に「文選集句」と言うのみで、句中に作者名を記さない。これらの詩句の詳しい典故についてはここでは触れないが、いずれも贈答の詩として集選詩が用いられて

いる。こうした遊びとしての集句、交遊の中に用いられる集句というのが、そもそもの集選詩の出発であった。孔平仲以降、集選詩として残るものではなく、張明華氏によると、明の帰荘に「嘗戯爲集選十数章」という文があるものの、伝わっていないという。よってその後の進展は、清代の集選詩を見るほかない。

清代に入ると、先に述べたように、乾隆年間に科挙に詩賦が取り入れられるようになり、『文選』の価値が増すにつれて、集選詩も増加の傾向にあることが、張明華『文化視域中的集句詩研究』から見て取れる⁹⁾。本稿では、それ以前の集選詩も含めて見てゆくこととする。その部分を補うことで、清代の集選詩の全体像が見えてくると考えられるためである。

康熙・乾隆帝の詩の愛好、博学鴻試、召試などにより、科挙に詩が取り入れられない時期にも、すでに詩作の熱が一部で高まりつつあったことは、先に述べた通りである。その中でも、高度に知識を示すことができ、また皇帝などの権威にふさわしい言葉を詩に取り入れるということから集句詩が登場する場面が増え、特に権威に献上するものとして作られた集句詩の中に、『文選』の句を利用したものが多く見られる。

また一方、それだけではなく、民間で作られた「集選詩」もある。それらは性質の異なるものと考えられる。よって、この二つにわけて、清代「集選詩」を見てみることにする。

(一) 宮中慶典の集選詩

皇帝に献上する、あるいは皇帝への敬意を込めて作られた宮中での一聯の詩の中に「集選詩」が見られる。張明華氏は、清代の「集選詩」の中に、「組詩」として、集選詩がまとまって発表されたものがあるとするが、その大変は、皇帝に献上するものである。以下その例を挙げる¹⁰⁾。

- 1 周清原「聖駕臨幸闕紀（集選詩）」四首。『幸魯盛典』卷二十五。
- 2 德昌「万寿頌十六章（集文選句并序）」十六首。『八旬万寿盛典』卷一百四。
- 3 程昌期「万寿頌十六章（集文選并序）」十六首。載于『八旬万寿盛典』卷一百十。
- 4 馮集梧「万寿詩十章（集文選并序）」十首。載于『八旬万寿盛典』卷一百十一。
- 5 顧王霖「万寿頌十二章（集文選并序）」十二首。載于『八旬万寿盛典』卷一百十。

そこで、皇帝に献上されるために作られた「集選詩」についてみてゆくこととする。

まず周清原「聖駕臨幸闕紀（集選詩）」四首は、『幸魯盛典』に収録される。『幸魯盛典』は、康熙二十三（一六八四）年、孔子の六十七代の嫡長孫にあたる孔毓圻の編

著であるが、康熙帝が康熙二十三年に山東の孔子旧居に巡幸し、真筆による「万世師表」を贈ったことによっても知られる。周清原の集選詩は、この康熙帝巡幸に際して献上されたものであり、『四庫全書』に収録される。「集選詩」と詩題の下にはつきりと記してあるとおり、詩句は全て『文選』から取られ、各句の後に原句の作者名を入れる。四首は五言十二句の形をとるが、ここでは第一首の最初四句を挙げる。

我皇秉至德「沈約」時泰玉階平「任昉」川岳遍懷柔
「顔延之」民思歌被声「顔延之」……

我が皇は至徳を乗り、時泰らかに玉階平かなり、川岳遍く懷柔し、民思歌声に被る。

「我皇秉至德」は、『文選』卷二十沈約「応詔樂遊苑餞呂僧珍詩」の句、「時泰玉階平」は、卷二十三任昉「出郡伝舎哭范僕射」、「川岳遍懷柔」は、卷二十二顔延之「車駕幸京口三月三日侍遊曲阿後湖作」、「民思歌被声」は、卷二十二顔延之「拝陵廟作」(『文選』は「民思被歌声」に作る)の句で、いずれも『文選』詩句を用いている。

先に、皇帝に献上される詩に集句詩が見られることを述べたが、『幸魯盛典』には、集句詩は周清原の四首の「集選詩」以外見られない。ここに『文選』が用いられたのは、皇帝に捧げる句を引用するにふさわしい権威ある書物として『文選』を認めているということであろう。ま

た、帝を言祝ぎ、宴に供する句が『文選』に多いことも集句詩の素材に選ばれた理由の一つと考えられる。

その後、皇帝に献上するための「集選詩」は、乾隆年間に急激に増加する。その一つが『八旬万寿盛典』一百二十巻に収録される一群の「集選詩」である。『八旬万寿盛典』とは、乾隆帝の八十歳を祝し、その盛世をたたえるものとして阿桂らによって編纂され、乾隆五十七年に完成したもので、その中の巻八十一から巻一百二十までが歌頌となっており、皇子、臣僚、生監等が献上した詩文が収録される。その中に「集選詩」が収録されている。『八旬万寿盛典』の歌頌には、『文選』以外を対象とした集句詩、集句頌も見える。例えば、翰林院編修錢枬の「寿叙徵篇」(巻一百十)は「集五経」として、『尚書』『春秋』『詩』『易』『礼記』の句を集める。他にも翰林院編修曹振鏞「歌頌万寿頌十二章(集五経)」(巻一百十一)も同様であり、こうした經典の集句と並んで「集選句」が収録されているのである。

それが先に挙げた、翰林院侍読・德昌「万寿頌十六章(集文選句)」、翰林院編集・程昌期「万寿頌十六章(集文選)」(巻一百十一)、翰林院編修・馮集梧「万寿詩十章(集文選)」(巻一百十一)、「翰林院庶吉士・顧王霖万寿頌十二章(集文選)」(巻一百十七)である。これらは、詩句の作者を明記しておらず、題に「集文選句」と記すのみである。代表して德昌の作品を見てみる。

(序) 臣聞天生烝人、樹之以君、莫不開元於太昊。伊昔有皇、勲超遂古。……頌曰、顯朝維清、發祥流慶、大人長物、對揚成命……(徳昌「万寿頌十六章」(集文

選句并序)「八旬万寿盛典」卷一百四(八) 臣聞く天烝人を生じ、之を樹つるに君を以てし、元を太昊に開かざるは莫し。伊れ昔皇有り、勲は遂古に超ゆ。……頌に曰く、顯朝維れ清み、祥を發し慶を流す。大人は物を長ぜしめ、成命を對揚す……

序の「臣聞天生烝人」「樹之以君」は、いずれも『文選』卷三十七劉越石「勸進表」、「莫不開元於太昊」(班孟堅「典引」)、「伊昔有皇」は卷二十四陸機「答加賈長淵一首并序」の詩句、「勲超遂古」は、卷四十任彦昇「到大司馬記室牋」から採っている。文が中心だが、詩句も引用する。頌の「顯朝維清」は卷三十四曹植「七啓八首」、「發祥流慶」は四十八班固「典引」、「大人長物」は、卷二十顔延之「皇太子釈奠會作詩」、「對揚成命」は、卷二十陸機「皇太子讌玄圃宣猷堂有令賦詩」の句を取ったものであり、こちらも詩、文から句を集め、詩としている。出典となる作品、詩句は、皇帝を言祝ぎ讃えるにふさわしいものである。序で九百三十三字、頌で五百十五字、合計一千四百四十八字に及ぶ作品を、全て『文選』の句で作りに上げたこの作品は、かなりの労作であり、翰林院官員の知性を、皇帝の前で示しうるものだったと言える。ただ、慶典にふさわしい句となると、同じようなものに

なるため、同じ作品から何度も引用したり、あるいは同じ句が複数の人の作品に表れることも少なくない。それでも『文選』に拘るのは、やはり『文選』を權威有る書物と認めているからであろう。『八旬万寿盛典』に収められた幾つかの集句の詩文は、全て經書と『文選』によるもののみであることは、これらが權威有るものとして考えられていたことを表しており、『文選』は、經書と同等に扱われているといえる。

本稿の最初に取りあげたように、小尾郊一氏が唐代の『文選』について、唐代において文選学が盛行したのは、なんといっても科挙に詩賦を課したことが原因で、当時『文選』は經書と同等の扱いを受けていただろうと指摘していることを挙げたが、清代の慶典に献上される集句詩において、『文選』はやはり經書と同様の地位を獲得していたと言える。ただ、その意味合いは唐代とはやや異なっていたようだ。つまり唐代の、学すべき規範としての經典、それに並ぶ『文選』という位置づけではなく、皇帝という權威に献上し、慶祝するに値する格式ある言語の原典として『文選』が經書に並んでいるのである。

この『八旬万寿盛典』に先だって、宮中では別にまた多くの人から詩を乾隆帝に献上する機会があった。それをまとめたものが『欽定千叟宴詩三十六卷』(乾隆五十年)である。実は康熙帝の時にも『御定千叟宴詩』四巻が編纂されたのだが、この詩集に収録される詩は多くはなく、集句詩も含まれていない。『千叟宴詩三十六卷』は、乾隆

五十年に乾隆帝が祖父康熙帝に倣い、皇帝自身が詩を読み、高齢の官紳らが唱和する形で作られた。そこで献上された詩の中に、『集選詩』を含む集句詩が見られる。収録される集句は以下の通りである。

広東提督・寶璣「集文選句」、(卷二)、瑪爾洪阿輕車都尉「集韓愈句」(卷七)、誥封通議大夫・達春「集書經」(卷七)、副參領・巴彥岱「集杜甫句」、佐領・王維寶「集文選句」(卷九)、内務府員外郎・楊維新「集文選詩」(卷十二)、内務府員外郎・福喜「集蘇軾句」(卷十二)、戸部員外郎・書明阿「集蘇軾詩句」(卷十二)、委參領・武林布「集易經」(卷十三)、步軍校・富爾敏「集李白句」(卷十四)、驍騎校・達三泰「集文選句」(卷十九) 原任八品筆帖式・札蘭泰「集杜甫句」(卷二十七)、馬甲・八十「集陸游句」等である。

この詩集は、『八旬万寿盛典』とは参加者の階層が異なり、高齢であれば「老民」と称される無名の人物も詩を献上している。そのためか集句詩も多彩であり、經書の他、杜甫、李白、韓愈、陸游詩から句を集めるものもある。その中で、最も多いのが「集選詩」である。

これらから、乾隆年間、康熙年間以上に宮中で作詩を求められる場面が増えていたことが推察される。これは科挙に詩賦が取り入れられたことと少なからず関わるものだろう。少なくとも詩を「雜学」で片付けられない状況が宮中にはあったと考えられる。同時に、皇帝への祝賀を述べるとなれば、權威ある古人の詩句を用いるこ

とは、礼に適い、慶典にふさわしいものであり、中でも『文選』の句は、格式が高いと考えられていたのではないだろうか。こうした宮中で編纂した大規模詩集の他にも、個人の別集の中に、同様に慶典に際して「集選詩」が提供されたことがしばしば見え、その数は非常に多かったと推察される。

王嘉曾は、康熙十八年に博学鴻試にて翰林院編修を授けられ、武英殿大学士から少傅となり文恭の諡を賜った人物である。別集に「皇上六旬万寿頌」が収録され、その注には「頌集經伝、序集文選」(『聞音室遺文附刻』)とある。これもやはり皇帝に献上する集句詩において、經書に並ぶものとして『文選』の句を用いた例である。

韓是升(雍正十三(一七三五)年-嘉慶二十一(一八一六)年)には、『集選三章寿 礼親王六十』(『聰鐘樓詩稿』卷三)があるが、これは親王の六十歳を寿ぐための詩であり、全て『文選』の句を用いる。「集選詩」が宮中慶典の場で続々と作られたことは、清代以前には見えなかったことであり、清代の特色である。張明華・李曉黎『集句詩嬗變研究』は、清代皇帝が挙行した慶典活動が集句詩作品を出現させたと指摘する¹¹⁾。皇帝の慶典活動が集句詩を牽引したのは、皇帝が詩を非常に愛好したという、清朝ならではの興味深い指摘である。一方『文選』の視点からみると、乾隆時代には、「集句詩」の中で、經書よりも『文選』が多く用いられていることは、『文選』の人氣を示すものとして注目すべきであろう。

(二) 民間の集選詩

宮中では「集選詩」が独自の地位と役割を得ていたことを見てきたが、それ以外の場でも「集選詩」は作られていたのか、作られたとすれば、どのようなものとして捉えられていたのだろうか。

先に登場した王嘉曾は、翰林院のエリートで、慶典のために「皇上六旬万寿頌」「聞音室遺文附刻」を「頌集経伝、序集文選」という形で作っているが、彼の別集の中には、個人の場で作った「集選詩」が散見する。には、「幽居集選」「聞音室詩集」巻一、「歳暮懷舊園許大都門」「聞音室詩集」巻二などは、権威を寿ぐ意味はなく、宮中を離れて作られている。「集選詩」は、宮中に献上するだけの詩体ではなかったのである。

そこで、更に民間で作られた「集選詩」の幾つかを見てみる。ただし、科挙に詩賦が取り入れられて以降は、集句詩、集選詩ともに数量が極めて多く、これらはすでに集句の研究書に取りあげられている。ここでは、それ以前の「集選詩」を中心に見てみることにする。

「集選詩」を刊行した際の、周囲の反応を記した文章がある。

甬上張萼山工記問善詠諧滑稽玩世、一言笑率常傾其座人、一旦集選句為詩、刻以行世、或疑之者謂、張子老於詩矣。「維古於詞必己出降而不能乃剽賊昌黎之言独

不聞乎。」余曰「此張子之詠諧也、風雅道喪、応酬体興、中無所主、而欲談詩不得不以模擬為牆壁、擗擗吞剥之余、人無完膚、我亦無真面目矣。」張子曰、窃人之言而可以為己言乎。我言之、而可使究竟為人之言乎、人已言之、雖我終不言可也、我所欲言雖使人代言之可也、此其所感深、而所見遠矣。雖然今世詞賦家、奉選体為聖書、朝吟夕諷、苦不能遍、掠幾句便如小兒吹蘆笙得一二声、似輒思隸太常矣。而張子左宜右有、如取如携此其才分不有過人者乎。蓋古來滑稽玩世如柳下東方、固非空疎奔鄙者之所能為也適張子以余久故属序其簡端遂書此以応。

(鄭梁「張萼山集選詩序」「寒村安庸集」巻一)
甬上の張萼山 記問に工 詠諧滑稽を善くして世を遊び、一言の笑 率常 其の座の人を傾かしむ、一旦選句を集めて詩を為り、刻して以て世に行ふに、之を疑ふ者或りて謂ふ、張子詩に老いたり。「維れ古の詞に於ける 必ず己より出で、降つて能くせず乃ち剽賊す昌黎の言独り聞こえざるか」と。余曰く、「此れ張子の詠諧なり、風雅の道喪はれ、応酬の体興り、中に 主る所無くして、詩を談じんと欲して模擬を以て牆壁と為さざるを得ず、擗擗吞剥の余、人に完膚無く、我にも亦た真面目無し」と。張子曰く、人の言を窃みて以て己の言と為すべきか。我之を言ふに、究め竟くして人の言と為さしむべきか、と。人已に之を言へば、我終に言はずと雖も可なり、

我の言はんと欲する所人をして代はりて之を言はしむると雖も可なり、此れ其の感ずる所深くして、見る所遠ければなり。然りと雖も今の世の詞賦家、選体を奉じて聖書と為し、朝に吟じ夕に諷もんずるも、苦だ遍くすること能はず、幾句を掠めて便ち小児の蘆笙を吹きて一二声を得るがごとく、輒ち太常に隸せんと思ふに似たり。而るに張子左宜右有、此を取るが如く携ふるが如く、其の才分人に過ぐる者有らずや。

この文章は「己巳」つまり乾隆十四(一七四九)年に書かれており、科挙に詩賦が入る以前のことである。張萼山とは、康熙三十年の進士で、河内知県となった寧波の張起宗である。詩に工で引退後は故郷で名士と唱酬を繰り返したという。その張起宗は諧諷を好む人物だったが、ある時「集選詩」を刊刻したところ、批判がましいことを言う人がいた。つまり剽窃に過ぎないものをわざわざ出版することを疑問視したのである。それに対し、鄭梁は、「集選詩」を詠諧つまり戯れの作とした上で、詩が応酬のためのものとなつてより詩の主体性はなくなり、模擬も詩の妨げとなり、自分の詩というものがなくなっている。人が言いたいことをすでに言ってくれているのならば人の言葉を借りてもよく、深い所で感慨が通じているのならそれはそれでよいという。更に『文選』の詩体は詩人の聖書とされているが、広く理解し自分のもの

にすることはできるものではなく、『文選』の句を取つてきて詩を作つても、所詮子どももの真似事のようになつてしまいがちだ。しかし、長起宗は全てに行き渡つており、自在に『文選』の句を操り、詩才ははるかに人を凌ぐという。

これは科挙に詩賦が入る以前に、すでに『文選』が聖典とされていたことを示すと同時に、『文選』の詩句を用いて詩を作ることが、一般に行われていたことを示すものである。しかし、出版まですることは少なかったのだろう。実際に集句詩集を作つたという記録はあつても、詩集が残っていることは少ない。それは個人の詩としては性情より詠じた詩とはいえず、残すに値しない一時的な遊戯の詩、と認識されていたためである。このように「集選詩」は、『文選』という難しい古典を使いこなす才覚を示すもの、という見方と、所詮切り貼りの詩であつて、詩人の心情に関わらない、作品として価値のないもの、と低く見る見方のはざまにあつたようだ。これは宮中の慶典とは異なる、文学作品としての視点からの評価が「集選詩」に寄せられていたことを伝えている。

いずれにせよ、この詩は知的な詩戯であることは確かである。こうした詩が受け入れられ、作られる場として詩会があつた。

『養素園詩』三巻は杭州園林を詠じた詩の記録である。もともと金氏の友莊庵は、中に十景を誇る名園で、詩に詠まれることが多かった。後に王鈞が「養素園」と名を

改め、詠まれた詩をまとめたものが『養素園詩』である。
卷一は清初の養素園十景「繞屋梅花」、「倚樓臨水」、「遠樹柔藍」、「乾溪雨漲」、「夏木垂陰」、「疎雨梧桐」、「三秋丹桂」、「古寺鳴鐘」、「秋深紅葉」、「遠山雪霽」を詠じたものを「十景旧作」として一百余首を収め、乾隆十八年（一七五三）年の序がつく。卷二は王容大の編輯による「十景新作」で斉召南ら名士が養素園十景を詠じ、一百五十首を収める。斉召南は集句を得意としており、陶淵明句を用いた集陶詩「繞屋梅花」を作っている。卷三は同じ十景を杭世駿以下、清初から乾隆年間の杭州名士十五人が詠じた詩一百五十首を収める。これは一種の詩会の詩である。その中で魏成憲は「集選詩」として十景を詠む。第一首を例に見てみる。

「繞屋梅花」

ト室倚北阜 室をトしては倚の阜に倚り
林園無世情 林園に世情無し
摘芳愛氣馥 芳を摘りて芳氣の馥しきを愛し
月露皓已盈 月露 皓として已に盈ちぬ
王生和鼎実 王生は鼎実を和へ
遊当羅浮行 遊びては当に羅浮行くべし
ト室倚北阜 室をトしては倚の阜に倚り
林園無世情 林園に世情無し
摘芳愛氣馥 芳を摘りて芳氣の馥しきを愛し
月露皓已盈 月露 皓として已に盈ちぬ

主催し、詩集として刊行する前提で作られたことを考えると、ただの同人の詩会というよりは、格式ある詩として提出されたものと考えてよいだろう。更にこのころしきりに南巡が行われており、召試で召される杭州人は多かった。この詩会での集句の作者はみな無名の人物で、学生が多い。この詩集に提供された集句詩には、召試に向けて知性をアピールする意味が含まれていた可能性もある。

このように、科挙に詩が取り入れられる以前、民間での「集選詩」は、知的遊戯の側面が強く、権威とは直接関係なく、あの『文選』に習熟している、という知性、詩才を示す詩として好まれたようすがうかがえる。

その後、科挙に詩が復活すると、『文選』は詩の規範として重要視されるようになり、「集選詩」もその数を増やしてゆく。張明華が紹介する「集選詩集」の多くは、科挙に詩が復活して以降のものである。

三 清代詩における科挙と『文選』

以上のことを踏まえて、改めて清代詩において『文選』がどういう位置づけだったのか、考証学の対象としてではなく、詩を作る立場から『文選』がどのように見られ、扱われてきたかを、見ておくこととする。まずは、科挙と関わりない時期の詩と『文選』についての例である。

『儒林外史』の作者である吳敬梓は、『文選』の詩賦に精通していたが、科挙からは距離を置いていた。友人の

王生和鼎実 王生は鼎実を和へ
遊当羅浮行 遊びては当に羅浮に行くべし

庭園を讀える一編の詩として立派に成立しているが、詩句は全て『文選』から取られている。「ト室倚北阜」は卷三十謝靈運「田南樹園激流植援」、「林園無世情」は、卷二十六陶淵明「辛丑歲七月赴飯還江陵夜行塗口」、「摘芳愛氣馥」は、卷三十一謝惠連「謝法曹」〔惠連〕贈別、「月露皓已盈」は、卷二十五謝宣遠「答靈運」、「王生和鼎実」は、卷二十潘岳「金谷集作詩」、「遊当羅浮行」は卷二十六謝靈運「初發石首城」による。この卷三に収録されるのは、当時の杭州詩人の名だたる人物ばかりであり、「集選詩」はそうした人物の詩会にふさわしい詩体として選ばれる知的な詩であると同時に、やはり詩宴の遊戯の詩でもある。

杭州は詩会が盛んな地であったが、この頃、集句詩を含む作品が詩会で作られていた様子が幾つか見える。その中で作品集として残っているのが乾隆十一（一七四六年）の『西湖修禊詩』である、これは杭州太守であった鄂敏が主催した詩会で、当時杭州は杭世駿が帰郷して詩社を結び、詩会隆盛の時期を迎えていた。参加者六十一名、詩を寄せた者八十五名という詩集であるが、その中に、『文選』を中心とした六朝から隋の詩を用いた集句が複数収録されている。同時に『詩経』による集句も見える。詩会は知的な遊戯の場であるが、とりわけ官僚が

程晋芳は、吳敬梓の伝の中で次のように記す。

其学尤精文選詩賦、援筆立成、夙構者莫之為勝、辛酉壬戌間、延至余家、与研詩賦、相贈答、愜意無間。……生平見才士汲引如不及、独嫉時文士如讎、其尤工者則尤嫉之。

（程晋芳『勉行堂文集』卷六「文木先生伝」）

其の学尤も文選詩賦に精しく、筆を援れば立ちどころに成り、夙に構ふる者之に勝ると為す莫し。辛酉壬戌の間、延きて余の家に至り、与に詩賦を研ぎ、相贈答し、意に愜ひて問ふ無し。……生平才士をみれば汲引及ばざるが如きも、独り時文の士を嫉むこと讎の如く、其の尤も工なる者は則ち尤も之を嫉む。

辛酉壬戌とは、乾隆六年、七年にあたり、科挙詩賦が復活する以前で、士大夫は時文に取り組み、詩を避けていた時期である。この時期の科挙と詩の関係が、先に挙げた『儒林外史』第三回の試験官周進と受験生魏好古のやりとりで描かれているのである。

吳敬梓が『文選』詩賦に精通することで詩をたちまち作れた、というのは、『文選』が詩賦を作るために極めて重要な書物と当時認識されていたことを示す。八股文の巧者は、詩に興味を持たず、『文選』を学ぶはずもない。ゆえに真の知性に欠けるものとして吳敬梓は彼らを嫌っていたのである。

得るがごとく、輒ち太常に隸はんと思ふに似たり。

明末清初は、馮惟訥の『古詩紀』編纂やそれに続く古詩に関わる書物の編纂に見られるように、詩において漢魏六朝を見なおし、文学の源流を学ぶべきであるという主張が生まれていた。しかし少なくとも科挙と関わりない場面では、『文選』の詩に精通することは、高等な趣味以上のものになり得なかった。

しかし、その時期でも、博学鴻試、召試が詩を以て試みられるようになり、詩の規範とされた『文選』が再び脚光を浴びるようになったという見解もある。付瓊氏は、博学鴻試が始まって詩を学ぶ気運が高まった時、『文選』が多くの人に読まれるようになったことを、張緝宗「文選後集序」の「己未博学宏試之科……而文選一書、復家弦戸誦于天下。（己未博学宏試の科……而して文選一書、復た天下に家弦戸誦す。）」の文から指摘する^{〔12〕}。「己未博学宏試」とは康熙十八年の博学鴻試である。

その後、科挙に詩賦が復活する前の状況を書きとどめたのが、先に「集選詩」を刊行することについての是非を論じた鄭梁の一文である。その一部を再び挙げておく。

今世詞賦家、奉選体為聖書、朝吟夕諷、苦不能遍偶、掠幾句便如小兒吹蘆笙得一二声、似輒思隸太常矣。

（鄭梁「張萼山集選詩序」『寒村安康集』卷一）

今の世の詞賦家、選体を奉じて聖書と為し、朝に吟じ夕に諷^{そく}んじ、苦しみて遍く偶すること能はず、幾句を掠めては、便ち小兒の蘆笙を吹きて一二声を

これが書かれたのは「己巳」（乾隆十四年）である。『文選』は広く聖典と認識されており、皆がその句を学ぶものの習熟することができないため、子供の下手な楽器の音色のように、きれぎれに句が出てきて、句に振り回されているようだという。『文選』を使いこなすのは、かなりの人材でなければだめだ、ということ、それよりは八股文で通常の科挙を目指すこととなったのである。

しかし、科挙に詩が復活した乾隆二十二年以降、『文選』は基本書として避けて通れないものとなった。洪亮吉（乾隆十一「一七四六」―嘉慶十四「一八〇九」年）が乾隆五十七年に同考官として黔省の任についた時、まず購入した書籍の中に、『文選』があったという。

（乾隆）五十七年壬子科、充順天鄉試同考官、即拝貴州学政之命。黔省僻遠、無書籍。為購經史・通典・文選諸書、置各府書院。黔人爭知好古、君之教也。

（『国朝漢学師承記』卷四）

（乾隆）五十七年壬子の科に、順天郷試の同考官に充てられ、即ち貴州学政の命を拝す。黔省は僻遠にして、書籍無し。為に經史・通典・文選の諸書を購ひ、各府書院に置く。黔人争ひて古を好むことを知るは、君の教なり。

洪亮吉は、經史、『通典』に加えて『文選』を購入して各府の書院に配置した。それが科挙の学問を積み、古典を学ぶ基本図書だったからである。

更に、陳鱣（乾隆十八「一七五三」―嘉慶二十「一八一七」年）は、科挙に『文選』の句が頻繁に出題されるようになったことを記している。陳鱣は嘉慶三（一七九八）年の挙人であり、記されているのは嘉慶初め頃の状況と考えられる。

近日試士詩題多出文選句。有某学使試蘇州府属諸生、以「東琴不隻彈」為題、場中謬然謂、琴字有誤、使者茫無応也。……今則刻本盛行、人各有編、而謬種流伝、罕能是正文字、又奚論熟精文選理哉。（『簡莊文鈔』卷六「文選詩題説」）

近日士を試みるに詩題に多く文選の句を出だす。某学使有り蘇州府に試み諸生を属め、東琴不隻彈を以て題と為すに、場中謬然として、琴字に誤り有りと謂ふも、使者茫として応ふる無し。……今則ち刻本盛行し、人各おの編有り、而るに謬種流伝し、能く是れ文字をた正すこと罕なり、又奚ぞ文選の理に熟するを論ぜんや。

「近日試士詩題多出文選句」は、科挙の試験に『文選』の句が出題され、『文選』が科挙合格のための必須の書となったことを示している。ところが、それに続く文は、

『文選』をめぐる試験場でのトラブルを記す。蘇州府での試験に『文選』の詩句が出題されたが、その句が「東琴不隻彈」だったことで、受験生たちがざわついた。この句は盧誼「覽古」〔『文選』卷二十一〕の「東瑟不隻彈」であり、「東琴」は「東瑟」の間違いではないかと気づいたからだ。しかし、使者は取り合ってくれることはなかったという。これについて、陳鱣は、各版本、李善注、五臣注などを照らして検証した上で、五臣注に「琴」と作るものがあり、これらテキストや注の緻密な検証ができていないために、誤りをもたらすのだとし、善本の必要を強く訴える^{〔13〕}。明清時代、『文選』の善本がないということはしばしば問題になっていたが、特に清代に科挙に『文選』が組み込まれて以降、その善本への要求は切実なものとなっていた^{〔14〕}。嘉慶十四（一八〇九）年、胡克家が「尤刻本」を重刻して「胡刻本」を出したのはこうした時であった。

清代に科挙に『文選』からの出題が目立つようになり、『文選』に対する関心が急激に高まったのは見てきた通りであるが、そうした傾向が『文選』にとつて望ましいものではない、という否定的な意見もあった。

杭世駿（康熙三十四「一六九五」年―乾隆三十八「一七七三」年）の著に『文選課虚』がある。「課虚」とは、陸機「文賦」〔『文選』卷十七〕の「虚無以責有、叩寂寞而求音。（虚無に課して以て有を責め、寂寞を叩いて音を求む。）」文章を作るのは、虚無から形有る有を求め、声無

き寂寞から音を求めるようなもの、と述べたところから取っている。つまり『文選』によって詩文を作るための書物として編纂されたもののだが、杭世駿は、その自序で『文選』について以下のように述べている。

六朝而後、惟杜子美能挾其精。逮至場屋、以律賦程材、類波莫挽、而斯道亡矣。宋人精選理者、向推蘇太簡、劉貢父二書、采摭過多、少所持挾、似童蒙之告、非賦家之心也。……斯編之作、意主於疏濬性源、擺脫凡想。……而或以『双字』『類林』之例相擬、則眞矣。

《道古堂文集》卷七「文選課虛序」

六朝よりして後、惟だ杜子美のみ能く其の精を挾る。場屋に至り、律賦を以て材を程るに逮び至り、類波挽く莫くして、斯の道亡ぶ。宋人選の理に精しき者は、向に蘇太簡、劉貢父二書を推すも、采摭すること過多にして、持挾する所少なく、童蒙の告に似、賦家の心に非ざるなり。……斯編の作、意は性源を疏濬し、凡想を擺脫せんことを主とす。而して或ひは『双字』『類林』の例を以て相擬ふるは、則ち眞なり。

先に、科挙に詩が取り入れられたために『文選』人氣が再燃したことを述べたが、杭世駿は『文選』が「場屋」科挙の試験場で詩賦で人材を評価するようになってから衰退の波に吞まれ、本来の『文選』の道が亡びたとする。

な工具書に頼って、『文選』詩句を用いた詩を作ろうとする輩も登場するようになり、『文選』と詩の関係は、より多様になっていったのである。

まとめ

清代は、文選学隆盛の時代と言われるが、それは考証学の面での話である。詩における『文選』の置かれた位置は、もっと複雑なものであった。清初の詩が科挙を阻害するものとされた時期には、詩そのものに取り組むことが批判の対象となり、『文選』の詩は、社会から遠ざけられていたかのような印象もある。しかし、「集選詩」とに目を向けると、その時期に『文選』は宮中で大きな役割を果たし、確固たる地位を築いていたことがわかる。詩としては独自性に欠けるものではあるが、『文選』は、権威と規範を象徴するものであり、「集選詩」はそうした語句のみで作られる最も権威ある詩体とされたのである。

また、皇帝の詩の愛好により、博学鴻試、召試で詩を試みたことで、『文選』の地位が高くなり、その後科挙に詩が入ったことで、詩の源流としての『文選』の権威は決定的なものとなった。『文選』が、唐宋詩よりも難解であり、唐宋詩はすぐに学べるが、『文選』ではそうはいかない、という認識があったためである。「集選詩」は、その時々の『文選』の姿を映す鏡であったといえよう。

また、集句詩について考えてみると、当時最も流行していた、唐詩句を集めた「集唐詩」には、幾つかの工具

本来の『文選』の道とは、試験のためではなく、詩の規範として、詩を作る立場から『文選』に関わることに、杭世駿は考えていたと思われる。文集に出てくる宋代の蘇太簡、劉貢父の二書とは、蘇易簡『文選双字類要』三卷、劉攽『文選類林』十巻を指し、杭世駿は、これらの著作が、詩を作るものの心になうものでなく、知識を並べ過ぎていると批判する。そして『文選課虚』については、それらとは異なるものであることを強調する。『文選双字類要』は、『文選』中の二字の語を分類して編纂したものであるが、内容は安易な工具書になっているため、『四庫全書総目提要』巻一百三十七では、「易簡名臣、不応荒陋至此。其時科挙之徒輯為此書（易簡は名臣にして、応に荒陋此に至るべからず。其の時科挙の徒輯めて此の書を為す）」（『四庫全書総目提要』巻一百三十七）と、受験生が名士蘇易簡の名を借りて作ったもの、としている。『文選類林』も同様に文の句を集めて分類したもので、『続文獻通考』（巻一百八十六）には、「取文選字句、可供詞賦之用者（文選の字句を取りて、詞賦の用に供すべき者）」であり、「南宋時業詞科者所贗託（南宋時業詞科の者の贗託する所）」だという。これらの書物は宋の「科挙之徒」「業詞科者」らが仮託したというように、科挙に携わる者との関連で述べられており、受験生が『文選』を学ぶために作った雑で安易な工具書だとされている。清初に真に『文選』に習熟した知識人のみが「集選詩」を作っていた時代から、科挙への出題を経て、安易

書があったことが知られている。馬瀚撰『唐句分韻初集四卷二集四卷統集二卷四集五卷』について『四庫全書総目提要』巻一三九では、「其書以唐人詩句分一百七韻、編次以爲集句之用。」としており、明・施端教編『唐詩韻匯』（『四庫全書総目提要』巻一九三）にも「大抵取供集句者之用。」とあるが、「集選句」の工具書と書籍は見当たらない。集句詩の工具書であるためには韻を元に編纂される必要があるが、『文選』にもそういった書物があったのかもしれないが、少なくとも広く流通するものではなかったと思われる。ゆえにこそ「集選詩」は作るのが難しく、価値が高かったといえる。

本稿の最初に挙げた許祥光「選樓集句」は、こうした流れの先に誕生したものである。許祥光（一七九九―一八五四）は、字を賓衡といい、広東番禺の人で、道光十二年（一八三二）進士に及第し、広西按察使となった人物である。この作品の特徴は、「集選詩」ではなく、「集選文」であることであろう。もちろんこれ以前にも「集選詩」の序が集選文である例は多く見られたのだが、「集選文集」は、確かにほとんど残っていない。ゆえにこの作品は非常に高く評価されたと思われる。同じく「集選文」を作った人物に孫璧文（一八三一―一八八〇）がいる。孫による『玉塘集選』は、『文選』の賦、文のみを用いて、工に仕立て上げた文が十四篇収録される^{『玉塘集選』}。光緒十三年の自序に、「選樓集句」と清朝の文選学について述べる。

国朝漢学、小学、駢文家皆深選学。其集句盛篇、彙篇為集、惟南海許賓衢農部「選樓集句」最為有声。

（孫璧文『玉塘集選』自序）

国朝の漢学、小学、駢文家皆選学に深し。其の句を集めて篇を成し、篇を彙め集と為すは、惟だ南海許賓衢農部「選樓集句」のみ最も有声と為す。

ここでは、清朝で文選学に詳しくかったのは、漢学つまり考証学者、小学者、駢文家であったという。こうしたものと並んで『文選』の句を集め篇をなした許祥光『選樓集句』を挙げている。考証学の他に、『文選』の句を集めたこの作品は文選学に習熟した者の成果の一つとして捉えられているのである。清代文選学のひとつの姿として、「集選詩」をはじめとする「集選句」は、もっと注目されてよいものかもしれない。

注

〔1〕小尾郊一 全釈漢文大系二六『文選（文章編）一』（集英社一九七四）解説

〔2〕張明華・李曉黎『集句詩嬗變研究』緒論（中国社会科学出版社 二〇一一）に、清代集句の特徴の一つに「求新」をあげ、集句の対象とする詩歌を類別した集句の登場だとする。「清代是集句詩的繁榮期。……清代集句詩可以概括為以下幾個突出特点……三是「求新」集李（白）詩、集陸（游）詩、

集李商隱詩、集『文選』詩、集『詩經』詩、集『玉台新詠』詩詩以及集宋詩等或者在前代沒有發展起來的詩歌類別、都在清代得到了一定的發展、出現了一些專門的集句詩集。都在清代得到了一定的發展、出現了一些專門的集句詩集。」

〔3〕「臆雨叢談」卷四「博學鴻詞制科 經學制科」に、「康熙八年……天子念編纂明史必需續學能文之士、乃詔啓博學鴻詞之科、以羅博洽之彥。……十六（六）は五の誤り）年詔下、次年己未三月初一日、試於休仁閣下。……至乾隆元年丙辰、試於休仁閣。……己未試題、「璇璣玉衡賦」、「御製省耕七（七）は五の誤り）言排律詩二十韻。丙辰、五六天地之中合賦」、「山鷄舞鏡七言排律詩」とあり、康熙、乾隆の博學鴻試の内容にいずれも詩賦があったことがわかる。

〔4〕陳康祺『郎潛紀聞二筆』卷十四「本朝特科得人之盛」に、「本朝特科、得人最盛。康熙戊午（己未の誤り）舉博學鴻詞、得彭少宰孫適等五十人。乾隆丙辰再試鴻博、得劉文定綸等十九（十五の誤り）人。乾隆己巳（辛未）の誤り）詔舉經學、得吳司業鼎等四人。又康熙朝兩次南巡江浙、召試諸生、得吳文格士玉等七十三人。乾隆六巡江浙、得王司寇昶等八十五人。三巡山東、得初尚書彭齡等十七人。四巡天津、得姚文僊文田等十六人。巡幸五台、得龍殿撰汝言等九人。」とある。

〔5〕唐詩における「韋蟾妓女統楚辭兩句」とは、『全唐詩』卷八〇二武昌妓「統韋蟾句」のことで、序に「韋蟾廉問鄂州、及罷、賓僚祖餞。韋以牋書文選句、授坐客請統。有妓起、口占二句、無不嘉歎。蟾贈數十千納之。」とあり、そこで韋蟾の要請に応えて武昌妓の詠んだとされる詩の最初の二句が、「悲莫悲

兮生別離」（『楚辭』少司命）、「登山臨水送將歸」（『楚辭』九弁）の二句をそのまま用いていることを言う。

〔6〕張明華・李曉黎『集句詩嬗變研究』（中国社会科学出版社 二〇一一）第三折 王安石的集句 北宋集句詩的最高成就。

〔7〕『四庫全書總目提要』卷一百七十三「黃屠集」

〔8〕『西湖百詠』自序に「乾隆十六年三月上浣、皇上南巡、敬獻迎鑾十詠、更成西湖十景望幸詩十章、並擊以序、恭呈御覽、還即付梓。」とある。

〔9〕同書が紹介する李炤祿『律選』、郭階『集選詩』、許懋和『集其清英集』は、いずれも清代後期の集選詩集である。

〔10〕張明華『文化視域中的集句詩研究』第三章第二節「集選詩」には、「組詩」としては皇帝に献上するもの他に、饒曼唐「集文選詩」十首をあげるのみである。

〔11〕張明華・李曉黎『集句詩嬗變研究』（中国社会科学出版社 二〇一一）第五章「集句詩在清代的高度繁榮」第一九七頁に「清代皇帝举行的慶典活動、也催生了一些集句詩作品。如康熙二十三年（一六八四）皇帝臨幸曲阜拝祭孔廟、乾隆五十年（一七八五）舉弁千叟宴、紀念乾隆皇帝八十歲寿辰幾次活動、都帶動了一批集句詩的出現。」と述べる。

〔12〕付瓊「清代科舉与『文選』接受」（『求是學刊』代三十六卷代六期 二〇〇九）。

〔13〕省略部分は以下の通り。「按文選盧子諒「覽古」詩云、「西征終双擊、東瑟不隻彈。」李善注「西征、東瑟已見西征賦」、宋元及元張伯顔重刊本皆如此。復考「西征賦」云、「恥東瑟之偏鼓、提西征而接刃。」李善注引『史記』「趙王与秦王会

于渾沱、秦王請奏瑟、趙王鼓瑟云云。」則作東瑟無疑。惟五臣注本「覽古詩」作東琴、然呂延濟亦引『史記』「秦王請奏瑟、趙王鼓瑟」之文。下云、「実鼓瑟、而言琴者、文之失矣。」是濟已改正作瑟。故宋時合刻六臣注、于詩本文作瑟、注云「五臣作琴。」自明毛氏汲古閣刻李善注『文選』反將詩及注並改作琴、与「西京賦」不照、殊為疏失、以致後人承誤。甚矣。」

〔14〕阮元『天一閣書目』卷四之三「集部總集類」に「文選六十卷（刊本）明嘉靖癸未李廷相識云、文選一書、古今學士大夫靡不重之、顧乏善本。近時所見、惟唐府版、而頗艱於得、旌德汪諒氏、偶獲宋刻、鏤諸梓。濮陽李子、為之書而饒諸首。」とある。

〔15〕これらの作品は張明華・翁小婷輯校『清代稀見集句詩詞集第三輯』（黃山書社 二〇一八）に、南京圖書館所藏の光緒十三年（一八八七）巾箱刻本に拠るものとして収録される。

※本稿は平成三十一年〜平成三十五年度科学研究費補助研究基盤研究（B）19101237『文選』の規範化に関する基礎的研究」の研究成果の一部である。